『賢愚経』における慈悲

三 宅 徹 誠

はじめに

『賢愚経』は仏の本生譚などを集めた説話集であるが、諸本においてその各説話の順序の異同が激しい。高麗蔵本と宋元明版、及び蔵訳の三種のテキストを比較しただけでも、その異同の激しさがわかる。また、最近の調査により『賢愚経』の日本古写経の全体像が明らかになったが、その説話の順序は、上記のテキストとはまた異なったものであった。では一体どのようにしてそのような多様なものになったのであろうか。『賢愚経』は、まず最初に、河西の沙門釈曇学・威徳等の八人の僧侶が、于闐の大寺での「般遮于瑟 pañca vārṣika」(五年に一度の法会)において各々話を聞き、高昌においてそれらをまとめて成立したとされる。その後、涼州に伝来したときに、沙門釈慧朗が、譬喩をまとめた経典が多数あることから『賢愚経』と名を改めたのである。『賢愚経』という名となるまでに時間が経過し長距離を移動をしていること、また、『賢愚経』はその性格上よく読まれたであろうことなどから、テキストが複雑化したと考えられる。

それに関して、「慈悲」など内容に基づいた編集もなされたのではないかと考え、その点にも触れつつ、『賢愚経』諸本の系統を解明することを目的とするのが本論である。

『賢愚経』における慈悲(三宅徹誠) - 169 -

1. 先行研究

『賢愚経』の全体的な研究としては、梁麗玲 [2002] がある。『賢愚経』の基礎的な資料などの確認、調巻・品順の問題や、内容面の考察、また敦煌などの壁画との関連にまで言及している。調巻・品順については、契丹蔵本が、元々の巻四と巻七・巻九と巻十を入れかえて改めたが、その原因は資料不足でわからない、としている。福井利吉郎 [1912] は、契丹蔵本・高麗蔵本・宋元明版・『経律異相』底本・敦煌本などを比較し、それらをもとに各地に散存してしまった東大寺本を確認し、それは十六巻本であったと主張している。三谷真澄 [2004] は、自らの過去の説に補訂を加え、漢訳と蔵訳の成立過程について述べている。つまり、宋元明版の古層をもとに蔵訳が成立し、また現行の宋元明版はそれが増広されたもので、高麗蔵本は現行宋元明版の調巻抄出本ではないか、としている。他に全体的な研究としては、高橋盛孝氏の蔵訳『賢愚経』の全訳などがある。その他、本生譚との関連での研究は多いが、ここでは省略する。

2. 『賢愚経』諸本の概要

テキスト以外に、巻数や品の順序などが確認できる文献も以下に挙げた。

A. 契丹蔵

11世紀前半以降成立。高麗蔵本『賢愚経』では、各品にその品が契丹蔵本の第何巻で何番目の品に相当するかが記載されている部分があり、そこから契丹蔵の巻数・品数が想定できる。福井利吉郎 [1912]、梁麗玲 [2002] 等が既に指摘している。十三巻本、六十九品か。

- 170 - 『賢愚経』における慈悲(三宅徹誠)

B. 金蔵

12世紀半ば以降成立。開宝蔵の覆刻本。金蔵本には欠巻があり、巻三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十三が現存する。十三巻本、六十五品か。

C. 宋元明版

宋版(思溪円覚蔵):12世紀前半~,元版(普寧蔵):13世紀後半~,明版(嘉興蔵):16世紀後半~。

大正蔵の校注に拠ったのみで実見はしていない。宋版本は「須達起精舎 縁品」第四十三の途中から「浄居天請洗品」第四十七までを欠く。十三巻 本、六十九品。

D. 碃砂版

13世紀前半以降成立。巻六を欠き、『宋版磧砂大藏經』では普寧蔵本で補っている。十三巻本、六十九品か。

E. 高麗版再雕本

13世紀前半成立。初雕本は開宝蔵の復刻本。十三巻本、六十二品。

F. 日本古写経

七寺:1175-1178年写,金剛寺:平安末期~鎌倉期写,西方寺:平安末期~鎌倉期写。

七寺本は、巻十を欠くが、それ以外の巻は全て現存、金剛寺本は、巻五、巻十一~十七が現存、西方寺本は、巻一、二、五、六、七、十、十二、十三が現存する。興津香織 [2006] によって、この三寺院の『賢愚経』は調巻品順が一致することから同系統であることが明らかになった。十七巻本、六十九品。

G. 蔵訳

824年以前に成立。蔵名:*mDzaṅs blun*。法成(Chos grub)訳。漢訳か 『腎愚経』における慈悲(三名徹誠) — 171 — らの重訳とされる。十二巻本,五十一品であるが,大英図書館写本のみ五 十二品。

H. 宝唱等撰『経律異相』底本

516年成立。『経律異相』では、『賢愚経』を引用した話に、『賢愚経』の第何巻の引用かを記した割注がある場合があり、そこから『経律異相』の底本である『賢愚経』を想定できる。十三巻本、六十九品か。

I. 宝唱撰『翻梵語』底本

宝唱(?-483-518-?)。『翻梵語』には、『賢愚経』における字句の説明が118項目挙げられている。解説する字句の巻次が書かれてあるので、その字句を含む品の巻次が確定できる。十三巻本、六十九品か。

J. 玄応撰及び慧琳撰『一切経音義』底本

玄応 (7世紀), 慧琳 (737-820)。

上海師範大学の耿銘氏が玄応音義中の『賢愚経』の項について研究し、 音義の各項目が第何巻にあるかを検討した結果、その底本は十六巻本では ないか、とする。慧琳音義中の『賢愚経』の項は、玄応音義を借用してい ることになっているが、項目の数・順序等、少々異なる部分はあるが、全 体的にはほぼ同じである。

K. 智昇撰『開元釈教録』底本

730年成立。『開元釈教録』第十六「聖賢集別生」のところで,『賢愚経』 中の話と一致する単独経典を列挙してある。

3. 諸本の比較

3.1 十三巻本・六十九品

十三巻本・六十九品であるのは、契丹蔵本・宋元明版・磧砂版・『経律 - 172 - 『賢愚経』における慈悲(三宅徹誠) 異相』底本・『翻梵語』底本である。宋元明版と磧砂版,『翻梵語』底本, 契丹蔵本の違いは,巻四と巻七,巻九と巻十にある。宋元明版の巻数を基 準に巻の並びを示すと以下の通りである。

宋元明版 • 磧砂版 : (1)2)(3)4)(5)(6)(7)(8)(9)(1)(12)(3)

『翻梵語』底本 : (1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(10)(9)(1)(12)(3)

契丹蔵本 : (1)2)(3)7(5)6)4(8)(1)(9)(1)(12)(3)

『翻梵語』は宝唱撰とされ、また『経律異相』も僧旻・宝唱等の撰述である。『経律異相』の底本は、未解決の部分もあるが、契丹蔵本に近いと推測できる。つまり、宋元明版の巻四と巻七、及び巻九と巻十とが逆になったものである。しかし、『翻梵語』の底本は上記のように巻九と巻十のみが逆になったものである。『経律異相』と『翻梵語』とは、同じ『賢愚経』を見ていないようである。

前述したが、磺砂版は巻六を欠いている。巻六を欠くのは重要な点で、 金蔵本も巻六に問題がある。高麗蔵本でも、巻六は短い一品を収録するの みという不自然なものである。

『開元釈教録』底本は,「出家功徳尸利苾提縁品」「沙弥守戒自殺品」「貧人夫婦疊施得現報品」を巻七とすることから,契丹蔵本の系統のものであろう。

3.2 上記以外の十三巻本

3.2.1 金蔵本

調巻・品順は,巻六を除いて金蔵本と高麗蔵本の二つの開宝蔵系統は全 く同じである。

金蔵本巻六について、所収する『中華大蔵経』はその底本を金蔵広勝寺本としている。金蔵本『賢愚経』というのは、品次の記載がないのを特徴 『賢愚経』における慈悲(三字徹誠) — 173 — とするが、巻六には品次がある。またその品次は、諸本の中で契丹蔵本の みに一致する。巻六第一話は「快目王眼施品第二十九」とある。しかし、 金蔵本においてはその話は三十番目である。ただ、『中華大蔵経』の巻六 の冒頭には、他の金蔵広勝寺本を底本とする巻と同様に表紙見返しの絵図 があり、巻六は金蔵広勝寺本であることも確かであるが、不自然さは否め ない。

巻六以外は一紙二十三行・一行十四字であり開宝蔵系統の版式に合うが、 巻六は、一紙二十三行・一行十五字である。紙継ぎ部分には「賢愚經六上 [丁数(漢数字のみ)] 鬱」とある。「六上」とあるのは、巻六で上帙という 意味であろう。この形式の書き方は、竺沙雅章 [2000] によれば、房山遼 刻石経に見られるようである。遼刻は契丹蔵を底本にしていたとされ、そ の結果、上記のような紙継ぎにあたる部分の文字まで刻したとされる。実 際に中国山西省応県木塔から発見された十二部の契丹蔵本を見てみると、 版式は毎紙二十七~二十八行、毎行十五~十八字であった。金蔵本『賢愚 経』巻六は一紙二十三行・一行十五字であり行数が一致しない。しかし、 紙継ぎ部分の書式は同じであった。訳者部分と紙継ぎ部分を記すと以下の 通りである。

• 訳者部分

金蔵:宋沙門禁覺共威德在高昌譯

巻六:元魏涼州沙門禁覺等在高昌郡 譯

高麗: 元魏涼州沙門禁覺等在高昌郡譯

・紙継ぎ部分

金蔵:賢愚經卷第三 第二張 鬱字号

巻六:賢愚經六上 二 鬱

高麗:賢愚經卷第一 第二張 鬱

- 174 - 『賢愚経』における慈悲(三宅徹誠)

cf. 応県:華嚴四十七 二 垂

よって、金蔵本『賢愚経』巻六が元々は金蔵本でなかったことは、『賢 愚経』諸本の比較や版式などから明らかである。また、『賢愚経』の品順 などから契丹蔵本もしくはその系統のものを借用した可能性が非常に高い。

3.2.2 高麗蔵本

高麗蔵本及び金蔵本は、かなり整形されたテキストである。各品をすべて「如是我聞」で始まるようにしてあり、また品末には流通分を付し、各品完結という形に整えている。

高麗蔵本の巻六は「月光王頭施品」の一品を収めるのみである。字数を 見る限り他巻と比べて分量が少なく不自然である。金蔵本では、底本が巻 六を欠いていた結果、それを契丹蔵本系統で補ったという可能性が高い。 つまり、開宝蔵の流伝途上で巻六を欠いていた可能性がある。高麗蔵初雕 本も開宝蔵を底本にしているので、巻六を欠くものを見た可能性がある。 巻六が欠巻であったと仮定した場合、「月光王頭施品」をどのようにして 補ったのであろうか。

仮説として、日本古写経系統の巻六を見たのではないかと考える。日本 古写経の巻六は「重姓品」「散檀寧品」「月光王頭施品」を収める。以上三 品の内、「重姓品」と「散檀寧品」はすでに高麗蔵本巻五にあるので、「月 光王頭施品」のみを巻六としたのではなかろうか。

以上、金蔵本と高麗蔵本を見てきた結果、開宝蔵の系統では、流伝途上で巻六を欠いていた可能性が高いことがわかった。そのことが『賢愚経』の品順を複雑化させた要因の一つであると考えられる。

3.3 十六巻本・十七巻本、六十九品

慧琳撰『一切経音義』では、巻頭の目次で「賢愚經十五卷 玄」とする ものの、玄応・慧琳ともに巻十六まで音義があり、底本が巻十六まであっ たことは確定できる。耿銘氏の研究などから十六巻本である可能性が高い ようである。

日本古写経の七寺・西方寺・金剛寺の各テキストは、おそらく全て十七 巻本であろうと思われる。西方寺本は十三巻までしかなく以下欠巻であり 確定はできないが、興津香織 [2006] は、調巻や品の順序が一致すること から、三寺院とも同系統で十七巻本であるとしている。

この二種のテキストは、巻数の違いはあるが、比較した結果、巻一から 巻九まで全く同じ品順のようである。さらに十三巻ではなく、十六巻もし くは十七巻である。何らかの関連があると考えられそうである。

また、日本古写経の本文には古い形を残している部分が多い。しかし、 経録上では『出三蔵記集』の「十三巻」が最も古く、「十六巻」「十七巻」 などの記載があるのは『衆経目録(彦琮録)』以降である。『賢愚経』が日 本に伝わった時点で、書写はするが編集はせず古い形が残ったが、中国で は読みやすく編集していったため、テキストが変化したのではないか。つ まり、日本古写経は、調巻としては古いものではないが、文章としては古 い形を残すものを伝えていると推測できる。

日本古写経では、宋元明版などの巻六の四話は巻十六・十七に散見する。 この四話が巻末にあるのは他のテキストには見られない特徴である。それ らの話を後に見つけて最後に付加したのであろうか。しかし、日本古写経 では巻六での順序がくずれ、「五百盲児住返逐仏品」が第64品、「富那奇 品」が第69品で最後になっており、解明し難い部分である。

3.4 蔵訳(五十一品,五十二品)と漢訳諸本

三谷真澄 [2004] は『賢愚経』諸本の成立過程を検討し、宋元明版の古層本を元として蔵訳が成立したと推測している。蔵訳は、大まかな順序が宋元明版と似ており、また宋元明版の巻九の品を全て欠いていることから、蔵訳と宋元明版との間に関連がある、としている。

蔵訳と宋元明版を比較してみると、宋元明版の巻四・七の部分は、蔵訳ではその宋元明版の順になっており契丹蔵本の系統を見たものではない。 金蔵本等で問題となった漢訳版本巻六については、「快目王眼施品」のみあって、他は欠く。

高麗蔵本と比較すると、蔵訳にあって高麗蔵本にないものがある。よって、蔵訳は高麗蔵本の系統、つまり開宝蔵系統を底本にはしていないようである。

3.5 まとめ

『翻梵語』は『賢愚経』の成立時期に近い頃に編纂されたが、その底本の『賢愚経』は宋元明版や契丹蔵本に類似した品順のものであった。本文に古い形態を残す日本古写経本・蔵訳本の品順は、金蔵本・高麗蔵本より宋元明版の系統に近いものであった。つまり、『翻梵語』底本系統が、『賢愚経』原本に近いのではないかと思われる。

『賢愚経』諸本を比較検討した結果、金蔵本中の巻六は、金蔵本ではなく、契丹蔵系統のものの借用であることがわかった。また、高麗蔵本巻六所収の品が「月光王頭施品」の一品のみであるのは、底本が巻六が欠巻であったので、その部分を日本古写経本巻六を参考にして作成したものと考えられる。つまり、金蔵本・高麗蔵本の底本である開宝蔵本の段階で巻六が欠巻であった可能性が高い。それが、諸本に混乱を生じさせている一因

『賢愚経』における慈悲(三宅徹誠) — 177 —

となっていると考えられる。しかし、それを要因とするだけでは品の順序 の相違は説明しきれない。そこで、次項では「慈悲」を中心として内容面 から見ていきたい。

4. 慈悲について

『賢愚経』諸本の相違について見てきたが、『賢愚経』がその性格上よく 読まれたため、その内容によって品順が入れかえられたということも考え られよう。そこで、品が入れ替えられた理由について、内容面から、特に 慈悲の面から見ていくことにする。

『賢愚経』は、基本的に六十九話で成り立っているが、その中、慈悲を 主題とするものは「須闍提品」「勒那闍耶品」「仏始起慈心縁品」などで多 くない。『賢愚経』では布施がよく説かれるが、慈悲心をもって行う布施、 特に自身の体を施すことを説く話が多い。そこで、慈悲心をもって衆生を 教済する布施について見ていくことにする。

ここで、再び宋元明版等の巻六に注目したい。巻五末「月光王頭施品」から巻六初「快目王眼施品」、そして次の「五百盲児往返逐仏品」と、三品連続して自身の体の布施の話である。つまり、この品の並びが自然ではなかろうか。前項で、金蔵本は巻六を契丹蔵本で補った可能性が高いとしたが、欠巻となった元々の巻六は、おそらく契丹蔵本巻六に収められているような品順であったのではないか。高麗蔵本では「月光王頭施品」から「大劫賓寧品」へ続くが、共通テーマは見出しにくい。

金蔵本や高麗蔵本では、巻六が欠巻であったがそれを他本で補ったとして、巻六については一応解決したが、その巻六以前の巻三も、宋元明版などと大きく異なる部分である。その部分について検討してみた結果、布施 — 178 — 『賢愚経』における慈悲(三字徹誠)

というテーマでまとめられることがわかった。高麗蔵本巻三は以下の通りである。品名の右に布施されたものを挙げた(③-15は巻三第十五品の意)。

- ③-15 鋸陀身施品 身体
- ③-16 微妙比丘尼品 食物
- (3)-17 阿輸泇施十品 十
- ③-18 七瓶金施品 金
- ③-19 差摩現報品 食物
- ③-20 貧女難陀品 灯火

巻三初めの「鋸陀身施品」は、他の諸本の巻三と同じである。しかし、それ以下は全く異なり、様々な巻から話を集めてきた感がある。推測するに、巻三についても欠けていたのではなかろうか。開宝蔵系統では巻三が「鋸陀身施品」以下を欠いていたため、身体の布施を主題とする「鋸陀身施品」と似た話を集めて巻三としたのではないか。ただ、「鋸陀身施品」が自身の体の布施なのに対し、他の話は物の布施である。しかし、ここまで揃うと意図があるように考えられるのである。

結 び

『賢愚経』の諸本を比較検討した結果,まず,金蔵本巻六が契丹蔵本もしくはその系統のテキストを借用した可能性が高いことがわかった。そして,その巻六に注目した結果,高麗蔵本にも問題があることがわかり,日本古写経の系統のものを見て補った可能性があるようである。以上のことから,開宝蔵の系統においては,流伝途中で巻六が欠巻となった可能性があると言える。

慈悲に関しては、『賢愚経』では慈悲を主題とする話はあまり多くない 『賢愚経』における慈悲(三名徹誠) -179-

が、慈悲心から出た布施をテーマとするものが多い。その点から品順を見た結果、宋元明版などの巻五末「月光王頭施品」から巻六初「快目王眼施品」へと続くのが自然な流れであろうと思われる。よって、金蔵本では契丹蔵本系統によって巻六を補ったが、それは『賢愚経』本来の形である可能性が高い。また、金蔵本・高麗蔵本巻三は、宋元明版などと大きく品が異なるが、内容を見れば布施で統一されており、意図的に集められた感がある。もしそうであるなら、「鋸陀身施品」以下の品が欠けていたので、それを他巻にある似た話のもので補ったと言えないであろうか。

品順の異同は、内容による編集や流伝における欠巻など、複数の原因が 複雑にからみあった結果であろう。現段階では、その原因を解明して諸本 の系統をすべて明らかにしえたわけではないが、その一部を解明できたと 思う。

注

- (1) 国際仏教学大学院大学では、学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点 の形成」において古写経調査を行っており、その調査の中で明らかになった ものである。
- (2) 興津香織 [2006] 参照。本論では紙面の都合上,諸本の品順の比較対照表を載せることはできないので,日本古写経と宋元明版との対照表等を載せる 興津香織 [2006] を常に参照してほしい。
- (3) 僧祐撰『出三蔵記集』巻九「賢愚経記」(大正蔵55巻 pp. 67c9-68a1)を参 照。
- (4) 例えば、「沙弥守戒自殺品第二十三」では「丹本此品在第七卷為三十四」 (大正蔵4巻p.380a17-18)とある。「摩訶斯那優婆夷品第二十一」では「丹本無此品」(大正蔵4巻p.373a24)とあるが、品数から見て「摩訶斯那優婆夷品」が実際になかったとは考えにくい。紙の欠損などで物理的に欠けたか、もしくは、日本古写経では品名を「優婆斯那優婆夷品」とするので、契丹蔵本においても「優婆斯那優婆夷品」であった場合、品名だけを見て別物と判断し「無此品」としたか、といった理由が考えられる。
- (5) 竺沙雅章 [2000] では、版式や千字文番号の違いなどから宋元期の版本大
- 180 『賢愚経』における慈悲(三宅徹誠)

蔵経を三つに分類する。その中の「第一類蔵経」にあたるのが開宝蔵・高麗蔵・金蔵・弘法蔵である。「第二類蔵経」は契丹蔵、「第三類蔵経」は宋元明版などの江南諸蔵である。

- (6) 『デンカルマ目録』に記載があるので(芳村修基 [1974] 第二編参照),山口瑞鳳 [1978] に拠りその成立を824年とすれば、その頃までには翻訳されていたと考えられる。
- (7) 高橋盛孝「1970〕参照。
- (8) 例えば,「阿難問八萬四千塔因三」の項では,最後に「出賢愚經第四卷」 とある(大正蔵53巻 p. 25b25)。
- (9) 例えば,「摩訶夜移(譯曰大行)第九卷」(大正蔵54巻 p. 999b10) とある。「摩訶夜移」という語は「善求悪求品」に出る。宋元明版では巻十第四十九であり,調巻が一致しないが,契丹蔵本には一致する。また,「摩訶波羅婆脩王(經曰大光明 譯曰大護寶)第十卷」(大正蔵54巻 p. 1010c3) とある。「摩訶波羅婆脩」と出るのは「大光明始発無上心品」であるが,宋元明版では巻九であり一致しないが,契丹蔵本に一致する。このように見ていった結果,『翻梵語』の底本は,宋元明版の巻九と巻十が入れかわったものであることがわかった。
- (10) 耿銘「玄應《賢愚經》音義校讀箚記」。同大学教授徐時儀氏より論文を頂いたが、雑誌に掲載されているか否かは不明。
- (1) 慧琳音義では、「僉然」「俛仰」「亘川」「罔然」「唒苗」「廁圏」「種桋」「利 躓」「財賄」「蟲道」の項が付加されるが、「失跨」「具騰」「嬴長」の項がな くなっている。玄応音義において「嬴長」は「波婆離品」中の語であるが、 「赊貰」という「二鸚鵡聞四諦品」中の語より後に来ている。しかし、慧琳 音義では「財賄」「蟲道」という「波婆離品」中の語が、「除貰」より先に来 ており、順序の異なるところが見られる。
- (12) 『開元釈教録』巻十六 (大正蔵55巻 p. 661b6-16)。

優波斯那優婆夷經一卷 (陳錄云抄賢愚經出第三卷新編上)

出家功德經一卷(抄出家功德品初無福增因緣出第七卷二紙新編上)

出家功德度福增因緣經一卷(抄出家功德品初兼福增因緣少分顚倒安置加證信 序并度人儀五紙新編上)

叔離比丘尼本緣經一卷 (陳錄云抄賢愚經出第七卷新編上)

沙彌守戒自殺經一卷(出第七卷)

二鸚鵡聞四諦經一卷 (出第十二卷)

鳥聞比丘法生天經一卷(出第十二卷)

五百鴈聞佛法生天經一卷 (出第十三卷)

堅誓師子經一卷(出第十三卷)

優波斯那經下九部九卷並出腎愚經

- (13) 『仏書解説大辞典』参照。
- (14) 詳述しないが、宋元明版で巻七にある「阿輪迦土施縁品」を巻四にあるとしたり、宋元明版で第九にある「迦毘梨百頭品」を巻十にあるとするなど、 契丹蔵本との一致が大半であるため。
- (15) 註(9)参照。
- (16) 『應縣木塔遼代秘藏』「前言」pp. 11-12。ただし,その中で経ではない 『一切仏菩薩名集』巻第六は,一紙28行・一行12-21字である。
- (17) 『應縣木塔遼代秘藏』p. 20。
- (18) 日本古写経では、高麗蔵本のように整形されていない部分を持つ品が、他の諸本と比べて多い。
- (19) 大正蔵54巻 p. 784c16。玄応音義では、ちょうど『賢愚経』の記載のある ところが破損しており不明である。
- (20) 例えば「出家功徳尸利苾提品」は、高麗蔵本・宋元明版では「如是我聞」で始まるが、日本古写経では「出家因縁其福甚多」で始まっている。その文言は高麗蔵本等では少し後に出てくる。つまり、「如是我聞」以下「出家因縁其福甚多」までは増広されたと推測される。
- (21) 「快目王眼施品」「五百盲児往返逐仏品」「富那奇品」「尼提度品」。
- (22) 「摩訶令奴品」「善求悪求品」「快目王眼施品」の三品である。
- ② 三谷真澄 [2004] は、「種々の譬喩因縁譚の集成という本経の性格上、増 広や調巻が歴史的にくり返されたであろう」し、「口承または写本として存 在しつつ歴史的に漸次、増広・抄出・調巻を繰り返しながら、そのある時期 の形態が、現存の版本の『賢愚経』として彫出せられ、またある時期に完成 していた漢字文献からチベット訳されたのが『ザンルン』である、とするの が最も正確な表現ではなかろうか」とする。

参考文献

梁 麗玲 [2002]: 『《賢愚經》研究』法鼓文化, 台北。

三谷真澄 [1997a]: 「*mDzangs-blun* (『賢愚経』) に関する一考察」『印度学仏教学研究』45-2。

三谷真澄 [1997b]:「『賢愚経』における「梵天勧請」―仏教伝道の契機として―」『教学研究所紀要』 6。

三谷真澄 [2004]: 「『賢愚経』研究における諸問題」嵩満也編『中国北方仏教文化研究における新視座』、永田文昌堂、pp. 21-41。

182 — 『賢愚経』における慈悲(三宅徹誠)

- 福井利吉郎 [1912]:「東大寺本賢愚経の研究」『藝文』三巻11・12号,『福井 利吉郎美術史論集 上』(中央公論美術出版,1998年)に再 録。
- 興津香織 [2006]: 「日本伝来『賢愚経』の復元的研究」『仙石山論集』 3。
- 高橋盛孝「1963]: 「賢愚経とザン・ルン」『東方学』26。
- 高橋盛孝[1970]:『蔵漢対訳賢愚経』関西大学東西学術研究所,大阪。
- 玉木弁立 [1980]: 「漢訳『賢愚経』と『mdsańs-blun』の成立について」『大正大学大学院研究論集』 4。
- 平岡 聡 [2005]:「『賢愚経』を構成する説話の帰属部派」『印度学仏教学研究』54-1。
- 出本充代 [1995]: 「撰集百因縁経の訳出年代について」『パーリ学仏教文化 学』8。
- 干潟龍祥「1954]: 『本生経類の思想史的研究』東洋文庫、東京。
- 竺沙雅章「2000]: 『宋元佛教文化史研究』汲古書院, 東京。
- 藤本幸夫 [1996]: 「高麗大蔵経と契丹大蔵経について」氣賀澤保規編『中國 佛教石經の研究』,京都大学学術出版会,pp. 241-281。
- 中 純夫 [1996]: 「應縣木塔所出「契丹藏經」と房山石經遼金刻經」氣賀澤 保規編『中國佛教石經の研究』, 京都大学学術出版会, pp. 193-239。
- 山西省文物局·中國歷史博物館主編『應縣木塔遼代秘藏』文物出版社,1991年, 北京。
- 芳村修基 [1974]: 『インド大乗仏教思想研究―カマラシーラの思想―』百華 苑、京都。
- 山口瑞鳳「1978]:「吐蕃王国仏教史年代考」『成田山仏教研究所紀要』 3。